

## はしがき

「あなたはあなたのままでいい」という言葉がある。

若者支援のなかで時どき耳にする言葉だ。

大学で「若者支援」というものを漠然と考え始めていたとき、私は、この言葉を見聞きするたびに複雑な気持ちになった。少し肯定された気分にならないわけではない、のかもしれない。しかし、自分の存在価値を肯定できないとき、その言葉は私の不安を通りすぎて、どこか遠くに投げかけられているようにも思った。それは、自分の状況や能力やあり方が、自分が見て経験してきた社会のなかでは認められそうにない、と強く思っていたからだろう。

ゆとり世代、バッシングや若者バッシングをいろいろなところで耳目にしながら、自分の進路に迷い、人生の先が見えない不安を感じながら生きてきた。そして、偶然なのか必然なのか、私は人々の基本的な権利保障の取り組む社会福祉を学ぶ学生になった。大学のゼミでは、若者の「生きづらさ」について考え、学び、そのなかで『君は君のままでいい』という本に出会った。この本は、1970年代から地域で教育実践をしてきた佐藤洋作氏が、出会ってきた子どもや若者との交流と実践について書いたものだ。先輩か先生が、「よい本だよ」とたしか言っていたと思うけれど、題名を見たときにはやはり複雑な気持ちになった。しかし、最後まで読んでいくと、そうした気持ちは薄らぎ、この本のあとがきにくぎづけになった。あとがきには、以下のような文章がある。

もう一度、私たちは学力競争から遁走し始めた子どもたちにも、「君は君のままでいい」と言い切れるのか自問自答する。今、

弱さも欠如も含めたまるごとの子どもを受容し、共に生きる覚悟が私たち大人に鋭く問われているに違いない。競争場裏においては敗者に甘んじるしかないような子どもたちに、ほんとうに「君は君のままでいい」と言い切れるのか、大人自身の真摯な自らへの問いかけに裏打ちされなかつたら、子どもたちに届くはずもないことばである。

(佐藤 1998：270-271)

このあとがきを読んだとき、冒頭に挙げた言葉への違和感を、ようやく言葉にして自分のなかで整理できるような気がした。大学院に進学したあと、東京で一度、これを書いた佐藤氏に尋ねてみたことがある。

「あれには、今ならどういうこたえができますか」2011年の夏のことだった。

佐藤氏は、「新しい活動もつくってはいはいるけど、まだこたえられていないだろうね」と言ったと思う。あれから、ただ漠然と若者支援に興味のある学生だった私も、活動するなかで出会う様々な人に刺激を受けながら、若者の生活状況と社会構造に課題意識を持ち、活動する人間の一になつた。活動するなかで、先に引用した言葉を何度も思い出す。はたして私は「あなたはあなたのままでいい」と誰かに向かつて言えるような活動ができているのだろうか。そして、私自身はこの言葉を素直に受けとることができるだろうか。

若者支援という言葉は、世界的に先進工業国の労働市場が変化し、賃金労働のあり方が大きく変わり、生活も大きく変化するなかで、日本では2000年代頃から若者自立支援政策の登場と相まってよく耳にするようになった。

実際、2000年代から立て続けに若者支援にかかわる政策が打ち出されている。しかし、それらの多くは労働環境や学校制度の大枠を変えるものではなく、ただひたすら若者の変化を求め、一方的に社会への適応を促すものに見える。現場で活動している人たちと話す機会においてでさえも、「なぜ若者に支援が必要なのか」「今の若者はナイーブだ」「親の子育ての問題だ」といったことを聞くことがあった。そんなに若者や親が悪いのだろうか。「生きづらくない」と思っている人々は、そんなに「正しい生き方」をしてきたのか。たびたび、そういう怒りが沸き上がってしまい、うまく思っていることを伝えられないことも多い。責任を個人に求めてしまうことなく議論することが、どう

してこれほど難しいのだろうか。いま、私たちが直面しているのは、権利保障の問題ではないのか。

私が社会福祉に強く惹かれ続けるのは、それが時には国家権力の道具となり人々を苦しめるものになってしまふことがあったとしても、社会福祉は経済や社会を維持するためではなく、一人の人間として存在していること自体の尊さのために、人の生と生活を守ろうとする論理を追求するものだからだと思う。社会福祉は権利のために差別や不平等と闘ってきた実践の歴史に学び、そしてそれを今の社会でも実現しようという取り組みであるはずだ。若者に「ありのままのあなたでいい」と言うだけでなく、実際に文化的に健康に安心して生きていくことができるような仕組みや実践をつくることを、社会福祉実践(ソーシャルワーク)は可能としていけるのではないか、いくべきなのではないか、と考えている。

しかし、社会福祉、特にソーシャルワークにおいても、実際のところ若者の状況が注目されてきたとは言いがたい。個別に問題が触れられることはあつても、若者支援としてのソーシャルワークの議論はわずかである。それは、なぜか。そしてもし若者とのソーシャルワークを考えるならば、どのような点を意識する必要があるのだろうか。こうした課題認識のもとで、本書は「若者支援」と呼ばれる営みについて、ソーシャルワークの観点から検討を加えた。本書の目的は第一に、ソーシャルワークの対象として現代社会における若者の生活困難を明らかにすること、第二に、若者の経験する生活困難を対象とするソーシャルワークにおける要点を明らかにすること、第三に、若者を対象とする法制度の課題と修正方向を提起することである。

本書の概要は序章の第6節でまとめているので、ここでは序章について少しだけ書いておきたい。序章では、若者が生きたる社会構造の変化を明らかにしてきた移行(期)研究の成果とともに、それが就労自立を基調とする政策潮流のなかでどう作用するのか、どういった限界を持つのか、そして社会福祉研究は「若者」をどう把握し議論してきたのかを整理し、本稿で用いる言葉の説明を通して、「若者支援」をソーシャルワークから考えるにあつての議論の

土台を整えているつもりである。ただし、いろいろな話題に触れるなかでやや冗長になってしまっている。しかしながら、こうした冗長さは私の力量不足は言うまでもないが、実際に社会福祉にかかわる人々から受けた「すでにソーシャルワークは若者を対象に取り組んでいるから、このような議論をする意味はない」「これから総合化・統合化とあって狭間の問題も包摂する議論があるのに、今、若者という固有の議論をする意味はあるのか」「ユースワークがあるから、ソーシャルワークであえて若者を支援する必要はない」といった意見に筆者なりに応答したいと思ったからである（前二者には序章第2節で、後者には序章第3節で応答しているつもりである）。そのため、削ることなくそのまま残した。これらの疑問を抱かれない方は、これらの部分は飛ばして読んでいただいてもよいかもしれない。